

平成 23 年度 博士後期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

「脳卒中者は病前との連続性を回復する際に作業療法を
どのように意味づけているか」

学位の種類： 博士（ 作業療法 学）

人間健康科学研究科 博士後期課程 人間健康科学専攻 地域作業療法学系
学修番号 06996604

氏 名：小林幸治

（指導教員名：山田孝教授）

【研究の背景】脳卒中者には発症からの時期によって異なる心理社会面の問題が生じる事が知られている。筆者らは先行研究で作業療法士（以下 OTR）側から脳卒中者の心理社会面への作業療法について検討した。作業療法領域での脳卒中者へ面接を実施した研究の文献レビューを行い、「介入の質」に関する質的研究が不十分である事も示した。【目的】本研究の目的は、脳卒中者が病前との連続性を回復する際に作業療法をどのように意味づけているかを面接から質的に明らかにする事である。【方法】入院・外来で作業療法を受けた在宅脳卒中者 20 名に半構造化面接を実施した。対象者のサンプリングは、麻痺の程度と社会的・家庭内役割変化の 2 軸から偏りなく選出した。事前に面接ガイドを作成したが、その質問項目は、病前・入院中・現在各々の生活の様子、病前と現在各々での老後イメージ、作業療法の訓練で可能となった作業、作業療法の訓練で良かったものと悪かったもの、担当 OTR の印象、作業療法の中で自信を高めたエピソード、再び生活を取り戻し障害を捉え直す上で重要だった事、今後できるようになりたい作業、とした。面接記録は修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した。本研究は平成 19 年度首都大学東京荒川キャンパス研究倫理安全倫理委員会の承認で実施した。【結果】脳卒中者の病前との連続性の回復に関して、{衰えを防ぐために動かす身体} {私の存在自体を支える家族} {仕事に代わる意味ある作業参加} {自己役割完遂への意志} の 4 カテゴリーを抽出した。これらは「病前」「入院中」「現在」「今後」の時間軸で構成され、「病前」は {漠然とした老後イメージ} だったが、「今後」は {明確化した老後イメージ} となった。作業療法の意味づけに関して {向き合い受け止める関わりの姿勢} {実際的で入念な計画による作業経験} {心身の回復を引き出す技術} の 3 カテゴリーを抽出した。コアカテゴリーは、OTR が脳卒中者との関係性を重視し生活向上に直結した関わりと心身両面の支援を行う事から [回復過程に寄り添う OT システム] とした。【考察】本モデルを用いる事で、臨床の OTR が 1 人の脳卒中者の問題を身体・家族・作業参加・意志の 4 つの視点から構造的に捉え、病前から今後への連続性を考慮した作業療法を行うことに繋がると考える。また、脳卒中者から見た作業療法の質の点では、今回得られた作業療法の意味づけの 3 つの要素が不足した関わりは、深みのない、回復過程に寄り添わないものになると考える。